フィールドで考える

「いのち」が育まれる場所

ラオス低地農村部の水田。人びとの主食であるモチ米を育て、そこに育つ動植物が日々の食卓を彩る。さまざまないのちが育まれ、それらが糧となり人びとのいのちを育む。だが、もうひとつ育まれる「いのち」があるという

岩佐（いわさ） 光広（みつひろ）
民博 機関研究員
専門は医療人類学、生命倫理学。高齢者ケアや終末期ケアに関心がある。ラオスでの調査を継続しつつ、現在は日本に定住するラオス難民の調査も進めている。

ラオス低地農村部の水田

雨季のあいまの透き通った空。青々と稲が茂る水田。

ラオスの中南部、サワンナケート県の低地農村部でわたしは二年ほど調査をしていた。空の青と水田の緑との鮮やかなコントラストは、深く印象に残るラオスの風景のひとつである。

ラオス低地農村部の生活の中心には水田稲作があり、ほとんどの人が水田稲作を営んでいる。この水田で育てられるのは、ウルチ米ではなく、モチ米である。これが彼らの主食となる。

ラオスは、雨季と乾季とがはっきりと分かれる熱帯モンスーン気候に属する。山地では焼畑耕作もみられるが、わたしが調査をしていた低地農村部では、雨季の天水を用いた水田稲作が一般的である。

ラオス低地農村部の水田。田んぼのあいまに樹木が立っている

雨季の訪れる五月前後から田起こしや苗床作りをはじめ、雨が十分に降って田んぼに水がたまれば田植えをする。除草などをしながら稲の成長を見守り、一一月頃、雨季が終わりを告げると実りの季節を迎え、稲刈りをする。近年になり灌漑が整備され、乾季でも稲作をおこなうこともできるが、それでも雨季の天水を利用した稲作が中心である。

水田は、主食となるモチ米を育てる重要な場所である。しかし、そこから得られるのは米だけではない。ラオスの水田にはところどころに樹木が残されているが、そこには果実がなり、木の上には鳥が巣をつくり、その根元にはコオロギなどの昆虫が棲みつく。畦には食用・薬用のさまざまな草が競うように生い茂り、ヘビやトカゲ、ネズミなどが棲んでいる。水を張った水田や水路には、ナマズやウナギなどの魚、カエル、カニ、水棲の昆虫が生息する。

ラオスにおいて水田とは稲作だけでなく、漁撈をはじめ、草木や果実の採集、昆虫の採集、野鳥などの狩猟の場ともなる。主食となるモチ米のほかに、漁撈や狩猟採集を通じてえられる動植物が副食として日々の食卓を彩る。さまざまないのちが育まれ、それらが日々の糧となり、人びとのいのちを育む。ラオスの水田は、いのちの豊かさを湛（たた）える場所なのだ。

水田で育まれるもうひとつの「いのち」

ラオス低地農村部に暮らし、その水田の豊かさに感銘を受けたわたしは、そのことを誰かに話したくてしょうがなかった。そんなある日、村の男衆の酒盛りに誘われた。チャンス到来である。

ラオ・ラーオとよばれるモチ米の焼酎を飲みながら、ほどよく酔いのまわったわたしは、ラオスの水田がどれだけ豊かないのちを育み、それがまた日々の糧になっているかについて話した。周りの男衆は、彼らにとっては当たり前であろう話に気持ちよく相槌を打ってくれる。

「そうだそうだ、俺たちはそうやって生きているんだ！」

気分よく一通り話を終えたところで、一人の男がニヤニヤしながら、含みをもたせながらこう言った。

「もうひとつ、育んでいる『いのち』があるぞ、わかるかイワシャ（岩佐）？」

周りの男衆は「まってました！」とばかりに盛り上がる。あれこれと答えてみたが、「違う」と一蹴される。見当もつかず考え込んでいると、別の男が説明をはじめた。

ラオス低地農村部では一般的に、新婚夫婦はしばらく親の家に同居し、その後新居を建てて独立するという手続きをふむ。同居するのは妻方の生家の場合が多いが、夫方の生家となることもある。いずれにせよ子ども夫婦と同居することになった親は、自宅に彼らの寝室をしつらえる。裕福な家であれば個室を用意するが、多くの場合は、家族共有の寝室の一画を板や布などで仕切るだけである。

新郎新婦にとって、これは少々困ったことになる。そう、「夜の営み」に差し支えがあるのだ。もちろん寝室の一画でも営めないわけではないが、やはり家族の目（耳？）が気になるという。では、どうするのか。ここで登場するのが、水田の近くに建てられた作業小屋（ティアン・ナー）である。

多くの世帯が、自宅から一、二キロメートルほど離れた場所に水田を有している。農繁期には、農作業をリタイアした年配の者や学校に通う子どもを残し、働き手となる家族が総出で作業にあたる。毎日水田まで通うのはたいへんなので、水田の近くに作業小屋を建て、そこに住み込んで農作業をする。だが、田植えや稲刈りなどの人手が必要な時期以外は、それほど人手を必要としない。そのため、家族の中心的な働き手以外の者は、必要に応じて自宅から水田に通う。家族で一番の働き手は誰かといえば、世代でいえば二〇代から三〇代である。そう、作業小屋に残る者として若い夫婦はぴったりなのだ。

ここまで一気に話し終え、男は話を止めた。男衆は意味ありげな顔でわたしを見ながら、笑いだした。しばらくして、わたしも思わず笑いだしてしまった。なるほどなるほど、そういうことか。雨季の作業小屋は、プライベートな時間と場所を確保するのにもってこいということか。稲を育てるだけでなく、さまざまな動植物が育つだけでもなく、人の生命が育まれる場所でもあるのだ。

ラオスの水田は、わたしが思っていた以上に、いのちの豊かさを湛えた場所であった。

田植えをする若い夫婦

乾季の水田でカエルをとる子どもたち。乾季の水田でも狩猟や採集活動がおこなわれる

作業小屋、ティアン・ナー

結婚式の風景。家族や親族を中心に多くの人びとが祝福に訪れる